**待降節第2主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年12月8日**

**「キリストと出会う」**

**イザヤ書52章7節**

**52:7 いかに美しいことか／山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え／救いを告げ／あなたの神は王となられた、と／シオンに向かって呼ばわる。**

**使徒言行録21章37～22章21節**

**21:37 パウロは兵営の中に連れて行かれそうになったとき、「ひと言お話ししてもよいでしょうか」と千人隊長に言った。すると、千人隊長が尋ねた。「ギリシア語が話せるのか。**

**21:38 それならお前は、最近反乱を起こし、四千人の暗殺者を引き連れて荒れ野へ行った、あのエジプト人ではないのか。」**

**21:39 パウロは言った。「わたしは確かにユダヤ人です。キリキア州のれっきとした町、タルソスの市民です。どうか、この人たちに話をさせてください。」**

**21:40 千人隊長が許可したので、パウロは階段の上に立ち、民衆を手で制した。すっかり静かになったとき、パウロはヘブライ語で話し始めた。**

**22:1 「兄弟であり父である皆さん、これから申し上げる弁明を聞いてください。」**

**22:2 パウロがヘブライ語で話すのを聞いて、人々はますます静かになった。パウロは言った。**

**22:3 「わたしは、キリキア州のタルソスで生まれたユダヤ人です。そして、この都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、今日の皆さんと同じように、熱心に神に仕えていました。**

**22:4 わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです。**

**22:5 このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にいる者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」**

**22:6 「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。**

**22:7 わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。**

**22:8 『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。**

**22:9 一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけた方の声は聞きませんでした。**

**22:10 『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。**

**22:11 わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました。**

**22:12 ダマスコにはアナニアという人がいました。律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。**

**22:13 この人がわたしのところに来て、そばに立ってこう言いました。『兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい。』するとそのとき、わたしはその人が見えるようになったのです。**

**22:14 アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。**

**22:15 あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。**

**22:16 今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。』」**

**22:17 「さて、わたしはエルサレムに帰って来て、神殿で祈っていたとき、我を忘れた状態になり、**

**22:18 主にお会いしたのです。主は言われました。『急げ。すぐエルサレムから出て行け。わたしについてあなたが証しすることを、人々が受け入れないからである。』**

**22:19 わたしは申しました。『主よ、わたしが会堂から会堂へと回って、あなたを信じる者を投獄したり、鞭で打ちたたいたりしていたことを、この人々は知っています。**

**22:20 また、あなたの証人ステファノの血が流されたとき、わたしもその場にいてそれに賛成し、彼を殺す者たちの上着の番もしたのです。』**

**22:21 すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』」**



**「弁明」という言葉をある国語辞典で調べますと、「みんなの前で、自分のとった行動の理由・事情を説明し、その正当さを証明すること。」と書かれています。政治とか裁判の世界でよく使われる言葉です。最近のテレビのニュースや新聞などで一日に一度は目にするか耳にする言葉ではないかと思います。「弁明」は私たちとは遠い出来事ではなくて、私たちもまた自分のとった行動にあらぬ疑いをかけられることがあると思います。日常の些細なことから何か大きなことまで。その時に私たちがその疑いを晴らして自分の身の潔白を証明するために説明すること、それが「弁明」なのです。**

**今日の聖書箇所の小見出しに「パウロ、弁明する」と書かれています。パウロはユダヤ人たちから「律法を軽んじることを至る所で教えている。その上に聖なるエルサレム神殿に異邦人を連れ込んで汚した」という疑いをかけられてそのために殴り殺されそうになり、ローマの千人隊長が止めに入ったのですが、それでも「その男を殺してしまえ」とユダヤ人の群衆から叫ばれてエルサレム中が大混乱に陥ったのです。**

**パウロは千人隊長に「ひと言お話してもよいでしょうか」さらに「どうか、この人たちに話をさせてください」と発言の許可を求めます。千人隊長は発言を許可します。パウロは階段の上に立ち人々がすっかり静かになってからヘブライ語で話します。**

**「兄弟であり父である皆さん、これから申し上げる弁明を聞いてください。」（22：1）こうしてパウロは弁明を始めたのです。「わたしは、キリキア州のタルソスで生れたユダヤ人です。」自らの生い立ちから語るパウロの弁明は21節まで続く長いものです。その21節まで語られる弁明は使徒言行録9章で記されていることとかなりの部分で重なります。**

**パウロが彼の弁明を聞いている人たちと同じユダヤ人であること。律法の教師であるガマリエルの元で律法の厳しい教育を受け熱心に律法を守ってきたこと。「この道」すなわちキリスト教を迫害していたこと。キリスト教を迫害するためにダマスコに行こうとして、その途上でイエス・キリストと出会った。アナニアという律法を忠実に守る信心深いユダヤ人アナニアをイエス様は用いられてアナニアから洗礼を受けて回心したこと。そして、キリストの証人としてイエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝える伝道者として召されたこと。さらに、イエス様はパウロがかつてイエス様を迫害していたことを知っているがためにユダヤ人に福音を語っても受け入れてもらえないからこそパウロを用いて下さること。かつてステファノの殺害に賛成していた者であるのにイエス様がパウロを用いて下さる、つまりイエス様の福音を語るのに全くふさわしくないものであるにも関わらずイエス様はパウロを伝道者として、しかも異邦人に福音を語るために遣わされたことを語ったのです。**



**これがパウロの語る「弁明」です。でもよくよく考えたらこれっていわゆる弁明でしょうか。自分にかけられている疑念を晴らすために身の潔白を説明する弁明でしょうか。もし、パウロが私たちが考えるいわゆる「弁明」をするのであれば、「私は伝道旅行において律法を軽んじるようなことは言っていない。現にテモテに割礼を施したではないか。また、エルサレム教会の命令に素直に応じて誓願を立てた者の頭を剃る費用を出したし、私自身も清めの儀式を受けた。私は律法を軽んじてなどない。むしろ重んじているのだ。それに、私は異邦人を神殿の境内に連れ込んでなどいない。あれはあなたたちの見間違えだ。私はあなたたちに殺されるどころか批判されるようなことは何もしていない」というようなことを言えばいわゆる私たちが考える「弁明」であり、パウロのそのような「弁明」を聞いたユダヤ人たちの怒りもきっと収まったと思うのです。**

**でも、パウロはそのような「弁明」はしなかったのです。では、パウロが行った「弁明」は一体何でしょうか。一体パウロは何を語ったのでしょうか。**

**パウロが行った「弁明」は「証し」です。イエス・キリストに出会って救われて、そしてこんなふさわしくない者が伝道者として用いられて今生かされているその喜びです。一言で言いますならば「私はキリストに出会った」ということです。イエス様に出会ってこんなに大きく人生が変えられた、迫害するものが福音を宣べ伝える者へと180度人生が変えられた、こんな私をイエス様は愛して下さり、こんな私がイエス様によって用いられている、その大きな大きな喜びをどうしても語らず入られなかったのです。**

**このパウロの「証し」を聞いたユダヤ人たちはさらに怒りを爆発させたことが22節以降に記されています。結果は火に油を注ぐことになりました。恐らくパウロにはこうなることは分かっていたでしょう。それでもパウロは語らずにはいられなかったのです。いわゆる「弁明」という名の「証し」をし、今日の旧約聖書のイザヤ書の言葉を用いるならば「良い知らせ」を語らずにはいられなかったのです。**

**先週の月曜日に臨時教区総会が行われました。総会の中である教師の按手礼式が行われました。按手を受けることで補教師から正教師となり洗礼と聖餐の聖礼典が執行できるようになるのです。東海教区では按手を受ける教師が前に出て、ひざまずいて、按手礼式を執行する教区議長がまずその教師の頭に手を置きます。そして出席している正教師が皆前に出て、ひざまずいている教師と前に立って手を置いている教区議長を取り囲むようにして肩などに手を置いて集まります。言葉で状況を説明するのは難しいのですが、皆が前に集まるのです。そうすると議長の手の上にも多くの先生の手があり多くの先生の力が加わりますからものすごく大きな力で頭を押さえつけられるのです。私も今から19年前に按手を受けましたが当時議長の先生の大きな手で大きな力でぐ～と押さえつけられたのを今でもしっかり覚えています。按手の重みは責任の重みと言われます。正教師・牧師というのはそれほどに責任の重い務めであると同時に、人の思いでは決してなしえない神様の御業なのです。それは、人間的に見て決してふさわしいとは思えないような者がイエス様によって伝道者として用いられているのは大きな喜びであるのです。そのように一人の教師が立てられる大切な場に関わらせていただけるのは感謝の思いで一杯でした。そして襟が正される思いがしました。**

**今回の教区総会で按手を受けた先生は女性の先生で、東京神学大学を2007年に卒業されて、その後15年程一信徒として教会にお仕えしてこられました。「教師として立つのが怖かった」というようなことをおっしゃられていました。そしてその間に結婚された旦那さんが献身して牧師になられました。そんな中でご自身が救急車で運ばれるご病気をされて、救急車の中で「私はこのまま神様の元に召されたら神様から「よくやった」と言ってもらえるだろうか、自分は神様からいただいた1タラントンの宝を地中に隠してしまってしまっているのではないだろうか」と考えて祈ったそうです。そうしたらこの命が助かったら伝道者として神様にお捧げしようと決心されたそうです。そしてこの日を迎えることができたのは神様の召しとお導きであり、本当に感謝していますというような「証し」を少し涙ぐみながらされていました。**

**先生の表情はキリストに出会った喜び、救われた喜び、恐れから逃げいていた者がふさわしくない者が今こうして教師として立つことが許されて、「良い知らせ」を宣べ伝える者へと用いられている喜びに満たされていました。先生も皆の前でもちろんパウロとは状況が違いますが、ご自分が受けた「良い知らせ」を証しをされたのです。**

**私たちも「良い知らせ」を宣べ伝えるのです。それはパウロや教師や牧師だけがすることではありません。私たち皆が行うのです。それは、私たちの誰もがそれぞれの人生を歩む中で「イエス様と出会った」からなのです。イエス様と出会い、イエス様の十字架の死によってこんな罪深い私の罪が赦されて救われた、そのことを信じて受け入れて洗礼へと導かれてキリスト者とされたのです。それは私たちが救われるに値する立派な歩みをしているからではありません。私たちが愛されるに値する愛に満ちた人間だからではありません。むしろ、救われるに値しない私たちであり愛されるに値しない私たちです。決してふさわしくない者です。そんなふさわしくない私たちをイエス様はキリスト者として豊かに用いて下さるのです。**

**私たちは、イエス様と出会って、救われて、こんなふさわしくない小さく弱い私が愛されて生かされて豊かに用いられているその喜びを私たちは証しをしていくのです。私たちが受けた「良い知らせ」を証しをしていくのです。**